

博士学位論文要旨

「過去」を基点とした恋愛関係と恋愛観の コミュニケーション学視点からの考察

西南学院大学大学院 文学研究科 英文学専攻 コミュニケーション学専修

志岐 早苗

序章

昨今、生涯未婚率の上昇、晩婚化の増加、若者の恋愛離れなど、「恋愛」に関連する事象が社会問題化している。また、ストーキング、リベンジポルノ、デートDVなどの犯罪は後を絶たず、これらは「恋愛」に端を発していると考えられる。このように、恋愛に関する事象が社会問題化しているにもかかわらず、これまで「日本人の恋愛」を対象としたコミュニケーション研究はあまり行われていない。さらに、コミュニケーション研究の多くは欧米の研究者を中心に、欧米の文化に則した理論や概念の構築が行われてきた歴史がある (Kim, 2002; Theiss & Nagy, 2012; 2013; 浜口、1996)。そのような理論を用いて、「欧米以外」の文化における人間関係やコミュニケーションを十分に説明することはできないということは、多くのコミュニケーション研究者たちから既に指摘されている (例: Kim, 2002; 中西、2011; 浜口、1996)。

本研究は、欧米で構築された恋愛に関する概念である「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009) を敢えて文化や社会的価値観の異なる日本の恋愛コミュニケーションに適用することで、欧米で発展してきた理論や概念が、日本社会や文化において適用できる部分とできない部分をあぶり出し、さらに「欧米以外」の研究者による「欧米以外」のコミュニケーションを説明する、理論構築の一端を担う貢献を果たすことを目的としている。また、日本社会や日本文化から影響を受けている人々の「個」に注目し、社会的要因、文化的要因などが「個」の恋愛観の形成や恋愛関係のあり方に対してどのような影響を与えるのか、またどのように変化させるのかについても注目していく。

第1章 恋愛コミュニケーション研究

コミュニケーション学領域における「恋愛研究」に注目し、これまで明らかにされてきた恋愛関係の特徴や恋愛研究が行われてきた背景などについて述べる。

恋愛関係とは、相互依存の傾向が強く親密性の高い関係性であるため (Bratslavsky, Baumeister, & Sommer, 1998; Weber, 1998)、相手に依存したり執着することは珍しいことではない。そして関係がうまくいかなかったり終焉を迎えると、ストーキングなどの行為に及ぶ者もいる (ミューレン・パーセル・パテ、2003)。このような事象は現代日本において頻繁に見られる一方、問題の背景にある「恋愛」が日本でどのように位置付けられ、認識されているのかについて明らかになっていることは多いとは言えない。

Kim (2002) をはじめとする研究者たちは、コミュニケーション研究の多くは欧米の研究者主導で行われてきたと主張しており、それらの研究のほとんどが欧米文化の価値観に基づいている。従って、「欧米で欧米の研究者が行う研究」と「日本で日本の研究者が行う研究」では、注目する点や得られる内容は異なると考えられる。「今」を生きる人間や社会から常に新しい視点が提起される「恋愛」や「恋愛関係」という対象に、社会的および文化的視点から追究することは、コミュニケーション学領域の発展において欠かせない視点であると考えられる。

第2章 〈研究1〉恋愛関係を維持する動機

「研究1」として「どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか (RQ 1-a)」、「どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか (RQ 1-b)」という2つのリサーチ・クエスチョンを提起し、インタビュー調査を実施し、その結果を分類・分析した。

文化や社会によって、コミュニケーションおよび人間関係に対する独自の考え方が存在することを、「恋愛コミュニケーション」に「Relational dialectics theory/動的な人間関係」(Baxter & Montgomery, 1996) を適用した複数の研究が表している (Goldsmith, 1990; Moore, Kienzle, & Flood-Grady, 2015; Wilder, 2012)。具体的には、「欧米で構築された理論は、欧米でのコミュニケーションの説明にとどまっている」、「欧米の理論を異文化に当てはめたとしても同じ、もしくは似た結果が導かれるわけではない」、「欧米の理論は、異文化のコミュニケーションや人間関係を説明することが必ずしもできるわけではない」などが、それらの研究によって示されている。

一方、恋愛関係に関して「関係の継続を望む」という点は、欧米と日本で共通していた。Duck (2007) がアメリカで行った研究によると、人は「成功している関係」や「失敗した関係」という言葉を使い、他者の人間関係を判断していた。「成功している関係」に必要なのは「継続期間の長さ」であり、ひとつの関係をどれだけ長く保っているか、ひとりの相手とどれだけ期間を一緒に過ごしているかということだった。そして、日本でも結婚生活を25年間継続すれば銀婚式を、50年間継続すれば金婚式を祝う風習がある。この風習は欧米由来とされているが(コトバンク、2018)、結婚生活の25年や50年がどのようなものであり、本人同士がどのように感じているかに関係なく、「長期にわたる関係の継続」は周囲の人々に祝福され称賛される。Canary & Stafford (1994) によると、恋愛関係にいる多くの者は、二人の関係を維持することを望んでいるというが、「世間」という「他者」もまた、自分と直接かかわりのない「他者」の恋愛関係の継続を望んでいる。日本でも欧米でも「関係の継続」に重きが置かれているが、変化し続ける「関係」を維持することは簡単なことではない(Baxter & Montgomery, 1996)。それにもかかわらず、なぜ人は自分の恋愛関係を維持しようとするのだろうか。そしてどのようなことが恋愛関係を維持する動機になり、どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせるのだろうか。さらに、それらの理由はこれまで恋愛研究が盛んに行われてきた欧米と異なるのだろうか。

RQ 1-a: どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか。

RQ 1-b: どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか。

研究方法

「どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか (RQ 1-a)」、
「どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか (RQ 1-b)」を明らかにするための研究、調査、および分析方法は、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 GTA)」で示された考え方を参考にする。ストラウス・コービン (2009) によると、GTA は社会現象を説明するための明確な理論を作ることを重視しており、データに立脚した仮説や理論の構築を目指している。GTA は、個人的印象や直感ではなく、データに基づいた確信に近いものを得ることを重要視する研究方法である。

「研究1」ではインタビュー調査を行う。インタビューは、起こった出来事や事実（外的要素）と感情や本人にとっての意味（内的要素）を記述するアプローチであり（Silverman & Marvasti, 2008）、人々の知覚、意味、状況の定義、現実の構成に接近するための最も強力な方法のひとつである（パンチ、2005）。さらに Lindlof & Taylor (2019) によると、インタビューは研究参加者が持つ特定の状況や出来事の記憶を呼び起こし、その出来事などに対する研究参加者の独自の見方や洞察など、「観察」だけでは見出せないことを明らかにする。またインタビューは、「研究参加者」と「研究者」の信頼感を育みながら行われることから、「過去の経験」や「恋愛」という個人的なテーマに関するデータを収集する本研究に最適な調査方法であると考えられる。さらにインタビュー調査方法の中でも、質問項目を緩やかに設定し、研究参加者の回想や語りのペースに応じてその場で柔軟に対応する「半構造化インタビュー」（猿橋、2011）を採用する。この半構造化インタビューを通して、研究参加者の言葉に込められた詳細な側面を引き出すことが可能である。

分析方法

本研究では研究方法から分析方法にわたり、GTA の視点を参考にする。そしてストラウス・コービン (2009) およびストラウス版 GTA を発展させた戈木 (2008; 2009; 2014) の手順を参考に、インタビュー結果の分類・分析を以下の通り行った。

- ・インタビュー・データを読み込んだ後、データを単語や箇条書き程度になるように細かく分断する（コード1）。データを文脈から切り離す目的は、筆者の先入観や思い込みなどによる主観的な分析を避けるためでもある。
- ・分断したデータ同士をまとめ、上位概念となるコードをつくる作業を行い、これを何度か繰り返す。そして、先につくったコード同士を関連付け、現象を表現する（コード2）。
- ・関連付けられたコード同士の持つ意味と現象をさらに関連付け合い、カテゴリーを導く（カテゴリー）。

研究対象者

本研究参加者は、異性愛者の13名の女性（平均年齢37.6歳）と13名の男性（平均年齢37.7歳）、計26名である。本研究では、個人が持つ恋愛経験を含む「過去」の経験が核となる。フリック (2011) は、調査対象の人物を選定する原則は、「研究テーマ」と

の関連性であると主張している。本研究では調査対象者を選定するにあたり、「ある程度の社会経験および恋愛経験があり、かつ、今後も新しい恋愛を経験し、恋愛関係をこれからも発展させていく可能性がある者」という条件を設定した。「個人の経験」という観点から、青年期を経て、壮年期・中年期にいる 30-40 代が妥当であると考え、その年代を調査対象者とした。

調査結果

インタビュー調査の結果、「どのようなことが恋愛関係を維持する動機であると認識されているのか (RQ 1-a)」について、「現在のパートナーは、他の誰かと代替することはできない」のように、相手そして二人の関係が唯一無二であるからこそ、関係を維持したいという理由が存在した。さらに、関係における「自分の役割」を通して「自分の存在意義」を見出す者もいた。そして、「日本社会で勝ち抜くためには、結婚して安心感をアピールできることが重要」など、社会や世間を意識する発言もあった。

さらに、「どのようなことが恋愛関係を維持する動機を失わせていると認識されているのか (RQ 1-b)」について、「相手が自分の恋愛パートナーとしてふさわしくないと思った時」、「恋愛関係において理想とする自分の姿が見出せないのなら、関係を維持する必要がない」など、自らの価値観に基づいた発言が多く、視点は「二人」ではなく「自分」に向けられていた。さらに、「母親として子供と家庭を守らなければならない」など、ジェンダー・ロールに則した理由も存在した。

第3章 〈研究2〉「過去」の経験がもたらす「現在」の恋愛関係および恋愛観への影響と変化

「研究2」として「過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観に、どのような影響を与えていると認識されているのか (RQ 2)」、そして「恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか (RQ 3)」という2つのリサーチ・クエスチョンについて、インタビュー調査を実施し、その結果を分類・分析した。

先行研究によると、「現在の恋愛関係」に影響を与える要因には「過去の恋愛」に関与することが多く、これは欧米と日本に共通していた (Choo, Levine, & Hatfield, 1986; Simpson, 1987; Slotter, Gardner, & Finkel, 2010; 石本・今川, 2001; 2003; 和田, 2000)。さらに、現在の恋愛関係そして個人の恋愛観に影響を与える別の要因として、個人の資質

や能力 (Merolla, 2017)、ジェンダー・ロールの違い (Buss & Barnes, 1986; Kenrick, Sadalla, Groth, & Trost, 1990; Sagrestano, Heavey, & Christensen, 2006)、恋愛観 (Knee, Patrick, & Lonsbary, 2003; Weigel, Lalasz, & Weiser, 2016)、関係における力関係 (Carpenter, 2017) などがあった。これらはすべて「個人」に関連する内容であり、「周囲」や「社会」との関連性はほとんどなかった。さらにこれらの研究は、「恋愛関係は、個人と個人の結び付きである」と考えられている欧米 (ゴードン、2017) で行われ、研究を行った研究者もすべて欧米出身であった。

一方、日本人の人間関係について原 (2012, p.218) が、「日本人は、人と人の関係にどのような影響が及ぶかを物事の判断基準としてきた」と述べているように、日本では、人は周囲や世間からの影響を気にしながら関係を構築し維持している。日本人は恋愛関係についても、それは二人だけの関係ではなく、周囲も含めた関係であると認識していると考えられる。それに対して、欧米の人々は日本人のように、「周囲」や「社会」が恋愛に影響を与えるとは考えてはいない (ゴードン、2017)。このことに注目すると、これまでの欧米での恋愛に関する研究結果は、日本人や日本社会に当てはまる部分もある一方、日本人を説明するには不十分、不適合な部分もあると考えられる。

そして、「現在の恋愛関係」に影響を与える要因として、前述の欧米での先行研究で挙げられていた個人の性質、恋愛観、ジェンダー・ロールなどは、人々がこれまでの人生において経験し、習得してきたものであり、かつ、過去の経験を通して形成された価値観であると言えるだろう。Duck & Sants (1983) は、人間を理解するにはその人間の「過去の人間関係」を理解する必要があると、さらに Merolla, Weber, Myers, & Booth-Butterfield (2004, p.261) は、「人間関係とは動的であり、人は現在向き合っている事柄だけではなく、過去の経験にも影響を受けている」と主張している。誰もが持つ「過去」だからこそ、その「過去」と「現在の恋愛」の関連性を「文化的」視点から明らかにしていくことには意義があると考えられる。

RQ2: 過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観に、どのような影響を与えていると認識されているのか。

RQ3: 恋愛関係は何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか。

研究方法・分析方法・研究対象者

「研究1」と同じ。

調査結果

インタビュー調査の結果、「過去の経験が現在の恋愛関係や恋愛観に、どのような影響を与えていると認識されているのか (RQ 2)」に関して、親から受け継いだ恋愛観を持ち続けていたり、幼い頃から見てきた親の姿を自分の恋愛に反映したり、親の姿を反面教師にしているなど、約半数もの研究参加者が恋愛観に自分の「親」を関連付けた発言をしたことは、今回の調査結果の特徴のひとつでもあった。さらに、個人の「過去の経験」や「過去に対する認識」もまた、現在の恋愛関係や恋愛観に影響を与えていると認識されていた。

そして、「恋愛関係は、何をきっかけにどのように変化すると認識されているのか (RQ 3)」について、「変化」とは環境や他者など「自分以外」の要因が起こしていると考えられていた。また、研究参加者たちは意図的に「相手との関係を変化させよう」、「相手を変えよう」とはしていなかった。「変化」という点には、日本人の「人間関係」に対する独自の考え方が反映されていたと言える。

第4章 〈研究3〉現代日本人の自己観

「研究3」として「自己観」に関する質問票調査を行い、その結果を分類・分析した。

インタビュー調査結果 (RQ 1-a, RQ 1-b, RQ 2, RQ 3) を分類・分析したところ、「独立的自己観」に関連した発言が多かったことを受け、「自己観」に関する調査を追加で行った。日本人と欧米人、特にアメリカ人との「自己観」や「個」に関する考え方の違いについて、これまで繰り返し比較および議論が行われてきた。Markus & Kitayama (1991) によると、欧米人は「独立的自己観」を持ち、個人と周囲の人間との境界が明確であり、自らを他者から切り離れた独自の存在であると認識している。一方、日本を含む東アジアの人々は「相互依存的自己観」を持ち、周囲の人間と自己の境界が曖昧で、自分の存在を周囲の人間関係の一部であると捉える傾向が強いとされている。

また Kim ら (1996) は、自己観を「文化的」ではなく「個人的」視点から、Markus & Kitayama (1991) の「相互依存的自己観」と「独立的自己観」の2つに、個人の中に両方の自己観を持つ「2文化型 (bicultural type)」、どちらの自己観も待たない「周辺化型 (marginal type)」という新たな2つの自己観を加えた「4つの自己観 (four-type model of self-construal)」を提唱した。本章では、研究参加者たちの自己観を4つに分類し、

個人レベルから日本人の持つ自己観とコミュニケーションの関連について追究する。

研究方法・分析方法

Kim ら (1996) の「4つの自己観」の分類基準に沿って、研究参加者 26 名の自己観を 4 つに分類した。まず、個々の回答を集計し、Microsoft Excel のデータ分析ツール（基本統計量）で全回答の平均値を算出した後、それを基に 26 名の自己観を 4 つに分類した。そして、GTA の考え方にに基づき、分類した自己観とインタビュー・データの両方を併せて分析した。

研究対象者

「研究 1」および「研究 2」と同じ。

調査結果

4 つの自己観のそれぞれの特徴が、研究参加者たちのインタビュー・データに反映されていた。一方、どの自己観の傾向が強いとしても、研究参加者たちは共通して、「自らと周囲を切り離さない」という認識を持っていた。これは、「独立的自己観」を持つ者も例外ではなく、自己を確立し、自己実現のために生きるという側面を持ちながら、恋人、配偶者、親などに依存することに加え、周囲、世間の目などを気にする傾向が強いという特徴も見られた。彼女/彼らは、Markus & Kitayama (1991) が主張する「独立的自己観」とは異なる特徴を併せ持っており、「日本社会」に適応しながら、それぞれが自己を確立していた。これは、自己観を「個人」レベルから注目したからこそ、導かれた結果でもあった。

第 5 章 〈研究 4〉「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」の日本人への適用

「研究 4」として、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009) を日本人へ適用することを試みた。

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」は、「社会的交換理論」(Thibaut & Kelly, 1959) と「相手の価値」を基に Sidelinger & Booth-Butterfield (2009) によって創出された概念であり、新しい恋愛関係を始めたり、関係を維持することを困難にさせるものであると定義されている。

本研究が、アメリカで構築された「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を文化や社会的価値観の異なる日本人のコミュニケーションへの適用を試みることに関連し、アメリカでの理論を韓国人とアメリカ人へ適用した Theiss & Nagy (2012; 2013) の研究に注目した。彼女たちは、アメリカ人研究者である Solomon, Weber, & Steuber (2010) によって創出された、既存の恋愛関係において予期せぬ出来事が起こった場合、それに対する認知と行動を説明した「Relational turbulence model/関係乱気流モデル」を、アメリカ人と韓国人に適用した。その結果、両者は同じような行動を起こすことがあったが、その行動に至る背景や理由には違いがあり、その相違点には文化のおよび社会的要因が関係していることが明らかにされた。このことから、本章においてアメリカで創出された「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」を日本人に適用することで、日本人独自のコミュニケーションや関係に対する考え方が浮き彫りになると考えている。

研究方法・分析方法

「研究1」、「研究2」、および「研究3」と同じ。

研究対象者

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」とは、「『自分の恋人や配偶者』が持っている特質、過去の経験、周囲の人間関係など、相手が人生を通して手にしてきたものなどが、恋愛関係を始めたり維持させたりすることを困難にする可能性があるもの」とされている。インタビュー・データを読み返した結果、この定義に当てはまる研究参加者は26名中3名存在し、全員が女性だった。

調査結果

今回の研究参加者の中で、「荷物を持っていた相手」と交際をしていた全員が、「相手に荷物がある」と知りながら関係を始めており、これはアメリカでの調査結果とは異なるものだった。しかも彼女たちはその荷物を、自分の所有物であるかのように捉えており、「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に対する「認識」が、アメリカと日本では異なることを示していた。

さらに相手の荷物とは、「過去」によってつくられたものである。今回の研究参加者たちの、「人間は過去の経験でできている」、「相手も関係も変えられない。変えることができるのは自分だけ」などの発言が示していたように、相手の「荷物」は相手の「過去の経験」のひとつであり、その荷物の存在自体を変えることはできない。変えられる

のは、相手の荷物に対する「自分の認識」であると考えられていた。

第6章 考察

本研究では、日本人のコミュニケーションを説明するための理論構築の一端を担うことに貢献すべく、恋愛関係や恋愛コミュニケーションを、個人が持つ「過去」という視点から追究した結果、以下のことが導かれた。

日本社会における「個（子）」と「親」

本研究は日本社会での「恋愛コミュニケーション」を追究し、文化的視点に加え、日本社会の「個」にも焦点を当てた。本研究参加者には、日本社会に生き、日本文化の影響を受けているという共通点から、恋愛観や恋愛関係に対する考え方などの類似点が見られた一方、相違点も見られた。その「異なる」部分をつくっていたのが、それぞれの人生経験であり、その中でも「親の存在」や「親との関係性」が、個人の恋愛観や現在の恋愛関係のあり方に影響を与えていた。浜口（1996）は、日本人にとって対人関係とは、自分と切り離せない身体の一部のようなものであると述べている。親は生まれた時から存在し、子は親の姿を見ながら成長していくため、親が子の恋愛観に影響を与えることは、自然なことであるとも言える。

そして、日本社会に存在する独自の「家族観」もまた、「個」の形成と関連している。日本人は世界のどの国と比較しても、「家族以外」の人に頼ったり、社会サポートを求めることができない国民性を持つ（OECD, 2015）。言い換えると、日本人は何か問題が起こったとしてもそれを「家族の中」で解決しようとする。例えば、日本で「振り込め詐欺（オレオレ詐欺）」が社会問題となって久しい。下重（2016）は、第三者からすると、「なぜ、そのような詐欺に簡単に騙されるのだろうか」と思うかもしれないが、実際にそのような状況に遭遇し、それが家族のこと、しかも自分の子供が困っているとなれば、平常心が保てなくなると述べている。また、自分の子供が罪を犯した後、親が世間に謝罪したり、中には自殺する親もいる。佐藤（2017）によると、親が子供の罪の責任を取ったり謝罪が求められる国は、世界的にも日本以外ほとんど存在しないという。どのような社会や文化にも、独自の家族観や親子関係が存在するだろう。だが、それらは社会や文化によって異なるからこそ、「子供のためには何でもする」と親が考えていたとしても、「何でもする」とは具体的に何をすることなのか、そして「何」が子供のた

めになると考えられているのかは、それぞれであろう。このように、文化や社会の影響を受けた家族観が根底にある中で、個（子）は家族の一員として存在する。そして、成長する過程において、親からの影響を受けながら個（子）の価値観は形成されていく。即ち、「個（子）」と「親」の関係性は、「日本独自」の人間関係のあり方や日本人を説明する上で、欠かせない要素のひとつであることが本研究から導かれた。

日本社会の「型」と恋愛

本研究参加者は30-40代ということもあり、その多くが「恋愛」と「結婚」を関連付けていた。さらに「結婚」とは、二人だけの問題ではなく、社会における常識、周囲の目、世間体、慣習などと切り離せないと考えられていた。

荒川（2017）によると、企業の中には「子供を育てたこともない人間に、部下を育てられるはずがない」という理屈により、40-50代の未婚男性を管理職に昇進させないということが実際に起きているという。このような未婚者・独身者に対する「嫌がらせ」は、「ソロ・ハラスメント（ソロハラ）」と呼ばれており、このソロハラは「結婚する」、「結婚しない」という問題を越えて、「ソロ＝ひとりで生きる」という、個人の生き方そのものを否定しかねない問題をはらんでいると、荒川（2017）は主張している。

一方、日本において、「結婚」が重要なものとして捉えられている理由のひとつに、「日本的な規範や慣習」の存在が挙げられる。池田・クレマー（2000）は、人は日常生活において、「こうあるべき」という「規範」に沿った行動をしていると述べている。この規範を「結婚」に当てはめると、平均初婚年齢が約30歳である日本において、「30-40代であれば人は結婚しているべきだ。そして、子供もいるはずである」という人々が期待する「日本の『規範』」から外れてしまった人は理論上、「普通ではない人」、「型から外れた人」になる。さらに、日本社会において「離婚」もまた、「型」から外れた行為である。仮に、ある夫婦にとって、離婚をすることが最良の選択であったとしても、世間的には一度築いた婚姻生活であれば、それを維持する方が好ましいと考えるのであろう。なぜなら日本では、長期的な関係に価値が置かれていることに加え、離婚を選択する人に比べ婚姻関係を維持している人の方が多く、離婚をすることは日本社会における、規範、つまり「型」からはみ出ることを意味するからである。だが、「型」にはまることを優先して「個人の幸せ」を求めるための離婚をせず、自分や二人の意思に反して婚姻生活を継続することは、一種の「自己犠牲」なのではないだろうか。

日本では、「型」というものが重要な意味を持つ。「型」通りの行為をすることは当然

だと考えられているからこそ、他者が「型」を破ることに對して、人は過剰に反応したり、激しく非難することがある。日本では、誰もが社会や世間と密接に関わりながら生きている。そして30-40代の本研究参加者たちもまた、自らと社会や世間は切り離せないということだけではなく、世間や周囲に望まれる「型」が何であるかを認識していた。

現代日本において、恋愛や個人の生き方の多様化が進んでいることは事実であり、それと同時に、それらが「社会問題」として扱われていることもまた事実である。日本では、「個人の自由」や「多様」であるべきことが、現実には「社会問題」になっている背景には、それらが未だ少数派であり、日本社会の「型」に入りきれていないからこそ、社会や世間から過度に注目されたり、強調される状況を生み出していると言える。「生涯未婚でいる」、「結婚しているが子供は持たない」、「還暦を過ぎて結婚した」、「LGBTQである」など、これまでの日本ではあまり一般的ではない「個」を貫こうとすると、「普通ではない」として人々の視線が集まることは、今もなお避けられることではない。このような現実、そして恋愛のかたちや個々の多様化が進む中、人々は「個」を犠牲にすることなく、周囲、世間、社会との共存について向き合い、独自の解決法を見つけることは、現代日本に生きるひとりひとりの課題であると言えるのではないだろうか。

「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」と自己観の視点から考察する日本人の恋愛コミュニケーションを説明する理論

本研究では、アメリカ人研究者によって構築された概念である「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」(Sidelinger & Booth-Butterfield, 2009)を日本人に適用した。その結果、アメリカの先行研究と異なっていたのは、「相手の荷物を自分のものとして扱う」という点だった。これはアメリカと日本における「Relational baggage/関係に持ち込む荷物」に対する「認識」が異なるだけではなく、日本では、「人間関係」が「そこにある」ものであり、「なるようになる」と捉えられてきたように(宮原、2006)、「荷物」もまた、人が積極的に働きかけたり、変化させようとする対象ではなく、「荷物は二人の間に『ある』」、「二人の荷物に『なる』」と捉えられていたと考えられる。

さらに、「自己観」に関する調査から、研究参加者たちはどの自己観を持っていたとしても、「自らと周囲を切り離すことはできない」という考えを持ち、それに基づいたコミュニケーションや人間関係の構築・維持などを行っていた。これは、日本人は「人と人との間柄」や「個と全体との関係」を重視する人間観を持つ(浜口、1982)という「日本人観」を支持する結果が、本研究からも導かれたと言える。そして、本研究にお

いて「独立的自己観」の傾向が強かった者は、「自らの自己実現や目的達成を主眼とする」(Markus & Kitayama, 1991) という独立的自己観の特徴に加え、「自らと周囲を切り離さない」という特徴も持ち併せていた。彼女/彼らはパートナーや親などに依存するだけでなく、周囲や世間の目にも敏感であり、それらはコミュニケーションにも反映されていた。このような本研究における「独立的自己観」の特徴は、Markus & Kitayama (1991) の主張とは異なるものであった。このことから、日本の中で「独立的自己観」の傾向が強い者と、欧米で「独立的自己観」の傾向が強い者が持つ特徴やコミュニケーションは異なると考えられる。なぜなら、それぞれの「個」が生きている「文化」そのものが異なるからである。

「個」と「文化」のあり方や関連性は、「不倫」という事象にも反映されている。昨今の日本において、有名人の「不倫」が報道される機会は多い。そのような中、当事者でもその配偶者でもない、言わばその不倫とは全く関係がなく、精神的苦痛などの被害を受けているわけでもない周囲の人々、世間、社会が、他者の不倫に対して過敏に反応する。そして、その反応や世論によって、不倫の当事者たちのその後の身の振り方、時には将来までが左右されることもある。一方、同じ「不倫」でも文化や社会が異なれば、人々が持つ認識は異なる。以前、ヨーロッパの一国の主が不倫をしていたことが報道された際、その大統領の不倫に対して、「不倫は個人的なこと。政治とは関係ない」というのが多くの民衆の意見だったという。政治家としての職務を果たしているのなら、それ以外の所で妻を裏切ろうが若い女性と恋愛をしようが、それは政治にも国民にも関係がないとされていた。つまり、「個」と「周囲」・「社会」にはっきりと「線」が引かれていたと言える。

このように、それぞれの文化・社会において「個」と「周囲」の関連性があったとしても、その意味合いは違う。少なくとも日本では、「個」と「周囲」は切り離すことはできないどころか、その境界線はないに等しい。現代日本における「個」のあり方は、数十年前から大きく変化していない(浜口、1982)。だからこそ、「個」と「周囲」が切り離されている欧米文化で構築された、「人間同士のコミュニケーションを説明する理論」を、日本社会においてそのままのかたちで適用ができない理由がここにある。

第7章 研究課題と今後の展望

本研究では、欧米で構築された理論を日本人のコミュニケーションに当てはめ、適用

できる部分とできない部分を指摘した。そして、日本人を説明する理論を構築するためには、日本独自のコミュニケーションや人間関係のあり方、考え方など、「社会的」および「文化的」視点が欠かせないことについても指摘した。そして、「個」と「周囲」を切り離せないという日本人独自の特徴は、浜口（1982）が約40年前に既に主張していた。そしてその30年後、原（2012）も同様のことを述べていた。浜口（1982）や原（2012）が主張するように、日本人は自らと周囲を切り離すことはせず、互いが関連し合い、そして何より「人間関係」に重きを置いていることは、日本人を理解する上で最も重要な視点でもある。実際に、本研究参加者たちもまた人間関係に関して、それぞれが独自の認識を持っていたと同時に、誰ひとりとして「人間関係」に重きを置いていない者はいなかった。そして、研究参加者たちは、「個」同士が築く人間関係は、コミュニケーションなしには存在しないということについても、過去の経験を通し認識していた。恋愛関係を含む、あらゆる人間関係の存在には「コミュニケーション」が必要不可欠である。そしてこの先、恋愛のかたちやあり方、またその認識などが変わったとしても、人間が主体となりコミュニケーションが行われ、恋愛関係が構築され維持されることは変わらないだろう。そして、そのコミュニケーションを説明するには、文化や社会の姿、そしてその時代を反映した「理論」が有効である。

本研究では、30-40代の異性愛者を対象として調査を行ったが、調査対象者の年齢、個人の恋愛対象が誰なのかなどによって、恋愛のあり方や認識は異なると考えられる。そして、恋愛のかたちや個々の多様化が進む中、日本人を一括りにするのではなく、日本社会という枠組みの中にいるさまざまな「個」を説明することができる「理論」を構築し、それを世界の人々と共有することには大きな意義があると考えられる。

引用文献

- Baxter, L. A. & Montgomery, B.M. (1996). *Relating: Dialogues and Dialectics*. New York: The Guilford Press.
- Bratslavsky, E., Baumeister, R. F., & Sommer, K. L. (1998). To love or be loved in vain: The trials and tribulations of unrequited love. In Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (Eds.), *The Dark Side of Close Relationships* (pp.307-326). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Buss, D. M. & Barnes, M. (1986). Preferences in human mate selection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 559-570.

- Canary, D. J. & Stafford, L. (1994). Maintaining relationships through strategic and routine interaction. In Canary, D. J. & Stafford, L. (Eds.), *Communication and Relational Maintenance* (pp.3-22). San Diego, CA: Academic Press.
- Carpenter, C. J. (2017). A relative commitment approach to understanding power in romantic relationships. *Communication Studies*, 68, 115-130.
- Choo, P., Levine, T. & Hatfield, E. (1996). Gender, love schemas, and reactions to romantic break-ups. *Journal of Social Behavior and Personality*, 11, 143-160.
- Duck, S. (2007). *Human Relationships*. Los Angeles, London, New Delhi, Singapore: Sage Publications.
- Duck, S. & Sants, H. (1983). On the origin of the specious: Are personal relationships really interpersonal states? *Journal of Social and Clinical Psychology*, 1, 27-41.
- Goldsmith, D. (1990). A dialectics perspective on the expression of autonomy and connection in romantic relationships. *Western Journal of Speech Communication*, 54, 537-556.
- Kenrick, D. T., Sadalla, E. K., Groth, G., & Trost, M. R. (1990). Evolution, traits, and the stages of human courtship: Qualifying the parental investment model. *Journal of Personality*, 58, 97-116.
- Kim, M. S. (2002). *Non-Western Perspectives on Human Communication*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Kim, M. S., Hunter, J. E., Miyahara, A., Horvath, A., Bresnahan, M., & Yoon, H. (1996). Individual-vs. culture-level dimensions of individualism and collectivism: Effects on preferred conversational styles. *Communication Monographs*, 63, 29-49.
- Knee, C. R., Patrick, H., & Lonsbary, C. (2003). Implicit theories of relationships: Orientations toward evaluation and cultivation. *Personality and Social Psychology Review*, 7, 41-55.
- Lindlof, T. & Taylor, B. (2019). *Qualitative Communication Research Methods*. Thousand Oaks, London, New Delhi, Singapore: Sage Publications.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Merolla, A. J. (2017). Further testing hope's role in constructive conflict communication. *Communication Quarterly*, 65, 481-501.
- Merolla, A. J., Weber, K. D., Myers, S. A., & Booth-Butterfield, M. (2004). The impact of past dating relationship solidarity on commitment, satisfaction, and investment in current relationships. *Communication Quarterly*, 52, 251-264.
- Moore, J., Kienzle, J., & Flood-Grady, E. (2015). Discursive struggles of tradition and non-tradition in the retrospective accounts of married couples who cohabited before

- engagement. *Journal of Family Communication*, 14, 95-112.
- OECD (2005). Social isolation. *Society at a Glance: OECD Social Indicators 2005*.
https://www.oecd-ilibrary.org/social-issues-migration-health/society-at-a-glance-2005_soc_glance-2005-en (December 9, 2019)
- Sagrestano, L. M., Heavey, C.L., & Christensen, A. (2006). Individual differences versus social structural approaches to explaining demand-withdraw and social influence behaviors. In Dindia, K. & Canary, D. J. (Eds.), *Sex Differences and Similarities in Communication* (pp.379-395). New York: Lawrence Erlbaum Associate.
- Sidelinger, R. J. & Booth-Butterfield, M. (2009). Starting off on the wrong foot: An analysis of mate value, commitment and partner "baggage" in romantic relationships. *Human Communication*, 12, 403-419.
- Silverman, D. & Marvasti, A. (2008). *Doing Qualitative Research*. Thousand Oaks, Los Angeles, London, New Delhi, Singapore: Sage Publications.
- Simpson, J. A. (1987). The dissolution of romantic relationships: Factors involved in relationship stability and emotional distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 683-692.
- Slotter, E.B., Gardner, W. L., & Finkel, E. J. (2010). Who am I without you? Influence of romantic breakup on the self-concept. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 36, 147-160.
- Solomon, D. H., Weber, K. M., & Steuber, K. R. (2010). Turbulence in relational transitions. In Smith, S. W. & Wilson, S. R. (Eds.), *New Directions in Interpersonal Communication Research* (pp.115-134). Thousand Oak, CA: Sage.
- Theiss, J. A. & Nagy, M. E. (2012). A cross-cultural test of the relational turbulence model: Relationship characteristics that predict turmoil and topic avoidance for Koreans and Americans. *Journal of Social and Personal Relationships*, 29, 545-565.
- Theiss, J. A. & Nagy, M. E. (2013). A relational turbulence model of partner responsiveness and relationship talk across cultures. *Western Journal of Communication*, 77, 186-209.
- Thibaut, J. W. & Kelley, H. H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. NY: Wiley.
- Weber, A. L. (1998). Losing, leaving, and letting go: Coping with nonmarital breakups. In Spitzberg, B. H. & Cupach. W. R. (Eds.), *The Dark Side of Close Relationships* (pp.267-306). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Weigel, D. J., Lalasz, C. B., & Weiser, D. A. (2016). Maintaining relationships: The role of implicit relationship theories and partner fit. *Communication Reports*, 29, 23-34.
- Wilder, S. E. (2012). A dialectical examination of remarriage dyadic communication and

communication with social networks. *Qualitative Research Report in Communication*, 13, 63-70.

荒川和久 (2017) 『超ソロ社会』 PHP 新書。

池田理知子・クレマー, エリック, M. (2000) 『異文化コミュニケーション・入門』 有斐閣アルマ。

石本奈都美、今川民雄 (2001) 「青年期における失恋後の立ち直り過程」『対人社会心理学研究』 1, 119-132。

石本奈都美・今川民雄 (2003) 「青年期における恋愛関係崩壊による心理的变化に影響する要因について」『対人社会学研究』 第 3 号, 39-45。

コトバンク (2018) 『金婚式・銀婚式』 <https://kotobank.jp/word/金婚式%2F銀婚式-897395> (閲覧日: 2018 年 12 月 30 日)。

ゴードン, ロバート, M. (著) (2017) 「愛のピラミッド」 ボルマス, レオ(編) 鈴木晶 (訳) 『世界の学者が語る 愛』 (pp.75-80) 西村書店。

戈木クレイグヒル滋子 (2008) 『質的研究方法ゼミナール』 医学書院。

戈木クレイグヒル滋子 (2009) 「実践しながら学ぶグラウンデッド・セオリー・アプローチ: 現象を捉えるステップ データの読み込み・プロパティとディメンション・ラベル名」『インターナショナル ナーシング レビュー』 第 32 巻 第 1 号, 46-56。

戈木クレイグヒル滋子 (2014) 「グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論」『Keio SFC Journal (慶應義塾大学湘南藤沢学会)』 第 14 巻, 30-43。

佐藤直樹 (2017) 『目くじら社会の人間関係』 講談社。

猿橋順子 (著) (2011) 「インタビュー法」 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (編) 『コミュニケーション研究法』 (pp.142-155) ナカニシヤ出版。

下重暁子 (2016) 『家族という病 2』 幻冬舎。

ストラウス, A.・コービン, J. (著) (2009) 操華子・森岡崇 (訳) 『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』 医学書院。

中西雅之 (著) (2011) 日本コミュニケーション学会 (編著) 「第 1 章 対人コミュニケーションの特徴と研究概要」『日本コミュニケーション学会 40 周年記念 現代日本のコミュニケーション研究—日本コミュニケーション学の足跡と展望—』 (pp.18-24) 三修社。

浜口恵俊 (1982) 『間人主義の社会 日本』 東洋経済新報社。

- 浜口恵俊（1996）『日本型信頼社会の復権』東洋経済新報社。
- 原聰（2012）『日本人の価値観—異文化理解の基礎を築く—』かまくら春秋社。
- パンチ, K. F.（著）（2005）川合隆男（監訳）『社会調査入門 量的調査と質的調査の活用』慶応義塾大学出版会。
- フリック, ウヴェ.（著）（2011）小田博志（監訳）山本則子・春日常・宮崎尚子（訳）『新版 質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』春秋社。
- 宮原哲（2006）『入門コミュニケーション論』松柏社。
- ミューレン, P. E.・パーセル, R.・パテ, M.（著）（2003）詫間武俊（監訳）安岡真（訳）『ストーカーの心理—治療と問題の解決に向けて』サイエンス社。
- 和田実（2000）「大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的
反応—性差と恋愛関係進展度からの検討—」『実験社会心理学研究』第40巻
第1巻, 38-49。